



満蒙開拓青少年義勇軍

満州に送り出された子どもたち



続出するなど、悲惨極まりない状況に置かれました。

「収容所では隊員が毎日のように死んで行く。食糧不足

で、敗戦国の想像にもつかない惨めさだった」「死体処理に握り飯一個ももらえないので競争で手伝った」「死体埋葬のための穴掘りも命じられたが、自分の掘った穴へ自分が葬られるという悲惨な者もいた」等々、生還者は、ソ連侵攻後の逃避行から収容所生活に至る凄絶な日々を異口同音に話しています。また、命からがら

生還して持ち帰ることができたものは、「内原訓練所でもらった水筒だけ」「渡満前にもらったお守り一つだけ」などということも述べています。

しかし、終戦を過ぎても、満州からの引揚げ者はなく、満州在留者の消息に関する情報も全くありませんでした。21年1月、漸く外務省管理局長より「満州開拓民に関する現状」が発表されました。「ソ連参戦直後関東軍に在りては、軍人軍属の家族の避難疎開に引き続き、満鉄、特殊会社及び民間の順位により疎開を開始（略）ソ連軍の進駐に伴う略奪及び婦女子に対する暴行は枚挙に暇なく、全満各地共に被害多く、特に婦女子の被害は想像以上なり（略）地方の開拓団及び義勇

隊、終戦の報遅れのため北満には避難不可能なりたる開拓民約十万余のことなり」。関東軍が、ソ連侵攻後の避難順位を「軍人軍属の家族」を最優先、以下「満鉄」、「特殊会社及民間」の順とし、開拓団や義勇軍は全く考慮されていないことが明らかにされました。しかも、開拓団や義勇隊には終戦の報が遅れたため、北満には避難不可能な開拓民が10万人以上残されているという理不尽な事実も明らかにされました。

その結果、上伊那の義勇軍・義勇隊開拓団関係者では、戦死21人、逃避行、収容所における死亡113人、合計134人が犠牲となったのでした。（元上伊那教育会長・矢澤静二）



義勇軍で唯一持ち帰ることができた水筒（橋爪五郎氏所有）

ソ連侵攻後の義勇軍・義勇隊が
6 どのような悲惨な犠牲を
強いられたか

昭和20年8月9日、ソ連が満州に侵攻しました。長野県の義勇隊や開拓団の多くがソ連国境地帯に重点的に配置されていたため、筆舌に尽くしがたい「逃避行」に追い込まれました。しかも、先行する関東軍が橋を破壊しながら退避して行くので、遅れて逃避して行く義勇隊や開拓団には増水した濁流を渡ることが困難で、濁流に流されてしまった子どもや母親も多かったそうです。命懸けの逃避行の末に辿り着いた都市で、義勇隊や開拓団は収容所に収容されました。しかし、そこでは、栄養失調と寒さ、発疹チフスの爆発的感染などが原因で死者が

逃避行、収容所、凄絶な日々